

インド・ロバートガンジにおける日食

大越 治

ロバートガンジは、ヒンドゥー教の聖地バラナシ（ベナレス）の南、皆既帯のほぼ中心線上にある小さな町（北緯24度40分59.7秒、東経83度03分52.8秒、標高364m）である。

★ 不安と期待のインドへ

21日（土）に成田を発ってカルカッタからインドに入った私たちは、夜行寝台特急が遅れたため、22日（日）の正午過ぎにバラナシに到着。ここで昼食を取り、私たち東京理科大学OB隊全員と明治大学OB隊の一部は、そのままバスでロバートガンジに向かった。残った明大OB隊の一部は、休息のためにバラナシに一泊することになる。

バラナシからロバートガンジへの道は、決していいとは言えない。それでも、広大なデカン高原の北東にできたシワのような丘陵地帯を越えて、通常なら2時間半も走れば到着する。しかし、折りからのデュワリ（カーリ女神のお祭り）による渋滞のため、バラナシから出るのに手間取り、約4時間の道中になってしまった。

私たちが宿泊するホテル・サベラは、ロバートガンジで唯一のホテルである。ここは理科大隊・明大隊の他、PT Sのグループがほぼ借り切り、残った5部屋には、カルカッタの気象台の観測隊が宿泊していた。インド式のホテルであるが、食事は上々、熱いお湯が出るなど、快適に2泊を過ごすことができた。ただ、暗くなると蚊が出てくるので、日本から持参した蚊取り線香とゴキジェットは、大活躍だった。

★ 順調なりハーサル

23日（月）は観測リハーサルを行う。日食前日の細い月に続いて、真っ赤な太陽が東の地平線から昇ってくる。インドの空の透明度はそれほど良くはない。低空の太陽は、線香花火の玉のように真っ赤であった。雲ひとつない快晴の空に太陽が高くなるにつれて、気温はぐんぐん上がる。秒信号とコマンドのアナウンスが流れる中、各自の機材のチェックや撮影の構図の確認が予定通り行われた。メンバーの一人が持参したデイスターフィルターを、みんなで並んで代わるがわる覗く。目立って大きなプロミネンスはないが、驚異的に落ちついたシーイングで、太陽の縁のスピキュールが一本一本、毛羽立つように見える。

リハーサルの後は昼まで、町を散策したり、体を休めてのんびり過ごしたり、各自自由に過ごす。昼食の時、ここに宿泊するPT Sのグループが到着する。結局、この晩、ホテル・サベラに宿泊した日本人は57名であった。ロバートガンジの町はデュワリのための電飾がきらめき、あちこちで爆竹が鳴っていたが、明日の観測に備えて早めに就寝する。

★ 完璧な、しかし余りに短い皆既

24日（火）日食当日。4時前に起床して、観測場所の屋上に上がると一番乗りだった。赤道儀の極軸を調整している間に人数が増え、高く上がっているカノープスなどの星野写真を撮影するメンバーもいる。

薄明、そして日の出。今日も雲一つない快晴だが、昨日に比べると地平線の上10度くらいまでが少し茶色っぽい。気温は18度を下回っていて、涼しい感じがする。

第1接触。太陽は上から次第に欠けていく。食が進むにつれて、鳥がねぐらの木に戻っていくのが見える。やがて蚊が出てきた。明け方使っていてまだ火が残っている蚊取り線香が役に立つ。気温が下がり始め、影の半影部分が縦と横とで違って見えるようになる。

第2接触。「金星！金星！」「わあーっ、ぶつぶつに切れている。ベイリーピースだ！」「あっ、コロナが見えている！」……ぐっと我慢して足元を見る。シャドーバンドだ。太陽に向かって打ち寄せる波のように、足元のコンクリート上を流れていく。続いて背後から頭上へ目を移す。青黒い影が、広がった投網のようにかぶさって来た。

本影錐に引きずられるように東の中天に視線を移すと、濃紺の空を背景に、銀線を編んだようなコロナがあった。その下には金星が明るく輝き、さらに下の地平線はオレンジに染まっている。

コロナから目を離さずに、コマンドの足立さんの声が10を数えるのを待って、シャッターを切り始める。シャッタースピードを交える時も、リリースを押す時も、コロナから決して目を離さない。一度だけちらっと手元を見た。シャッターダイヤルの数字が読める明るさだ。4秒露光の2コマ目を切つてすぐ、双眼鏡を目に当てる。銀ねず色の無数の光線が踊っている。内部コロナが眩しい。東西に伸びて急速に暗くなるストリーマーを見て、南北のブルームを見て、あーピンクのプロミネンスが……と思う間に西側が急に明るくなってきた。早くコロナの印象をビデオに録音しなくては……「コロナの形は……あっ、ダイヤモンドリングだ！」

第3接触。急いでビデオを広角側にズームアウトする。肉眼では去って行く本影錐は認められなかった。シャドーバンドを確認する余裕はなかった。

終わった。短い。ほんの一呼吸か二呼吸ぐらいにしか感じられなかった。あたりは急速に明るくなっていったが、体感温度は追従せず、しばらくは肌が涼しく感じた。

ホテル・サベラの屋上で観測した我々の他に、明大グループとPTSグループの大部分は、近くにあるRSMインターカレッジの校庭で観測を行った。この校庭では他に四季の旅行社のグループと現地の方々が集まった。また、ホテル・サベラの屋上から北東に見える小学校の屋上には、アショカ・ツアーズと思われる十数人のグループが見えた。サベラに宿泊しなかった人々は、いずれも当日の朝、バラナシから移動してきたものである。カルカッタの気象台のチームは、サベラより南西の、より中心線に近い学校の屋上で観測している。

日食天気階級表で「4」がつく皆既は、1991年以来である。